

巻頭言

独立行政法人
理化学研究所
理事長
野 依 良 治



理化学研究所（理研）はいったい何処から来て、何者であり、そしてこれから何処へ行こうとしているのか。平成17年（2005年）の今年、理研は大正6年（1917年）の創設から数えて88年、「米寿」という一つの節目を迎えた。顧みて理研は当初の財団法人から、株式会社、特殊法人、さらに独立行政法人と姿を変えながらも、常にわが国を代表する自然科学の総合的研究所であり続けた。そして、今後も理研は燦然と輝き続けたい。

高峰譲吉、櫻井錠二両先生によって提唱され、大河内正敏先生が先導し実践された「理研精神」は、時代を超えた本質的な思想として、現在にも脈々と受け継がれている。かつて、仁科芳雄先生らの率いた「科学者の楽園」は、湯川秀樹、朝永振一郎先生のノーベル賞をはじめ大きな花を咲かせて、基礎科学をわが国に定着させた。加えて、科学知識に基づく様々な力強い技術を産業界に実現した。実社会への貢献にむけたたくましいベンチャービジネス精神の発露であった。

科学と社会のかかわりがますます深まる現代、また先達のたゆまぬ努力により社会の信頼が高まるなかで独立行政法人に衣替えした理研には、さらに自立性と自律性を高めた経営への取組みが求められている。「科学研究とは、果てしなく続く『知の旅』である。目的地への到達よりもさまざまな出会い、良い旅をすること自体に大きな意味がある。そして優れた研究は有為の人を育て、また社会にも貢献する」－私自身の研究観である。多くの地球規模の問題を抱え、そしてさまざまな社会的矛盾を内蔵する時代であるが、研究者には、広い自然観と社会観をもちそれぞれの価値観に基づいて本来の使命の達成に邁進して欲しい。21世紀の人類社会における最大の課題は人間性に根差した「文明と文化の共生」であろう。正義の科学技術は文明の基盤であり、また国力の源泉でもある。一方で創造性豊かな学術はかけがえのない文化の重要な要素である。文明と文化が相携えて真に豊かな未来社会をつくらねばならない。

これまで科学者は自然界の真理追求に、技術者は現代社会の問題の解決に携わってきた。今世紀の研究者には、加えて未来社会の潮流を読む能力が求められる。理研の優れた知性と瑞々しい感性が科学と技術の新たな地平線を拓き、世代を超えて持続性ある社会づくりに貢献することを願っている。この「理研精神八十八年」がこれまで受け継がれてきた伝統をわが国の多くの人に伝え、新しい時代にふさわしい「理研精神」の創造の糧を提供できれば幸いである。